

|               |   |                 |                   |
|---------------|---|-----------------|-------------------|
| 授業科目名<br><英訳> | フランス語学フランス文学(特殊講義)<br>French Language and Literature (Special Lectures) | 担当者所属・<br>職名・氏名 | 人文科学研究所 准教授 森本 淳生 |
|---------------|---|-----------------|-------------------|

|          |       |     |   |              |             |     |    |          |      |          |     |
|----------|-------|-----|---|--------------|-------------|-----|----|----------|------|----------|-----|
| 配当<br>学年 | 3回生以上 | 単位数 | 2 | 開講年度・<br>開講期 | 2018・<br>前期 | 曜時限 | 金2 | 授業<br>形態 | 特殊講義 | 使用<br>言語 | 日本語 |
|----------|-------|-----|---|--------------|-------------|-----|----|----------|------|----------|-----|

|    |                     |
|----|---------------------|
| 題目 | ミシェル・フーコー「文学と言語」を読む |
|----|---------------------|

[授業の概要・目的]

ミシェル・フーコーが1964年12月にブリュッセルで行った講演「文学と言語」を精読し、フーコーの思想における文学の問題を考察することを通じて、近現代における文学と言語の特性について考察する。

この講演でフーコーは古典主義時代の作品から近代文学を区別する特徴として、レトリックの消滅を挙げている。18世紀末までは、言語作品は「ある種の沈黙した原初的言語」たとえば「神の言葉、真理、モデル、古代人たち、聖書」、あるいは「自然」との関係においてのみ存在し、この根源的な言葉をレトリックの力によって解読し翻訳するものだった。しかし「19世紀以降、人々はこの最初の言葉を聞くことをやめ、そのかわりに、無数のささやき、すでに言われた言葉の堆積が響くことになる」。そのときレトリックの空間にかかわって現れるのはマラルメの「書物が象徴するような「書物の容量/巻volume」だが、それはまさしく原書という言葉である神の「大いなる書物」(聖書)の消滅を画する出来事だった。

フーコーは近代文学の本質を「侵犯」のうちに見る。文学とは限界のたえざる侵犯である以上、個々の作家は他の作家を否定し、個々の書物(作品)は他のすべての書物を否定する。それは単なる新旧の交代ではない。原初の言語との関係を喪失した近代の文学言語は、文学であることの印をみずから定義しなければならないが、根源となる言葉が消滅した以上、この定義、この文学の自己証明が完全に実現することはない。文学と言語が一致することはない、両者のあいだにはつねに距離が介在する。こうしたとき、言葉は根源を志向するが決して一致しえないという意味で、鏡の空間のなかにあり、シミュラクルをなすと言える。『失われた時を求めて』が全巻を通じて、書かれるべき作品の計画、文学を実現する計画しか語ることがないのは、そのためである。

しかし、この講演でフーコーが注目しているのはなによりも言語の「空間性」である。言語は古来、時間的なものと考えられてきた。物語る、約束するという行為は言語と時間との結びつきをしめしているし、時間は文字として後世に伝えられるから、時間は言語を通してみずからを歴史として意識することができる。これに対して、20世紀における「言語は空間的なものである」とフーコーは指摘し、まずベルクソンによる言語の空間性の批判つまりベルクソンは言語を時間的なものとは見なしていなかったをとりあげ、ついで言語の時間性に基づく神話として「創造」の概念を批判したうえで、ジャン=ピエール・リシャールのマラルメ論に依拠しつつ、言語の空間性の具体的な分析プログラムを考えていく。驚くべきことに、フーコーはこうした言語の空間性の議論を大きく展開させ、これを来るべき言語のあり方の予兆として読み解こうとしている。その意味で講演「文学と言語」は、この時期の代表的著作『言葉と物』(1966)の文学論、とりわけその結論部の予言的な叙述と密接に関わるものでもあった。

## フランス語学フランス文学(特殊講義)(2)

### [到達目標]

- ・ フランス語文法の諸項目に習熟し、それを実際の読解において使いこなせるようになる。
- ・ 複雑な構文、豊富な語彙の思想的文章をある程度のスピードと正確さで読みこなせるようになる。
- ・ 文章の細部の読解と全体的な理解とを有機的に結びつけ、立体的に読むことができるようになる。

### [授業計画と内容]

テキストは約70頁あるので1回の授業で5頁から6頁ほど読み進めることにする。初回の授業で、担当者を決めるので必ず出席のこと。授業では担当者が担当部分の内容を要約して説明したうえで、時間の許す範囲で原文を精読する（精読は他の受講者にも参加してもらうので予習のこと）。

第1回 イン트로ダクション：「文学と言語」概説。授業の進め方の説明。担当者への割り振り。  
第2回～第14回 「文学と言語」を読む：各担当者による発表と原文精読。  
第15回 まとめ

### [履修要件]

特になし

### [成績評価の方法・観点及び達成度]

平常点50%、期末試験50%

### [教科書]

プリント配布

"Littérature et langage" [conférence aux facultés universitaires Saint-Louis à Bruxelles en décembre 1964], in La Grande étrangère. À propos de littérature, édition établie et présentée par Philippe Artières, Jean-François Bert, Mathieu Potte-Bonneville et Judith Revel, Éditions de l'école des hautes études en sciences sociales, 2013 p. 75-144.

### [参考書等]

(参考書)  
授業中に紹介する

### [授業外学習(予習・復習)等]

必ず予習をして授業に臨んでください。

### (その他(オフィスアワー等))

KULASISの「オフィスアワー機能」を参照

オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。